

## 【 論文 】

### 哲学堂祭 100 年間（1919-2018）に行われた講演 ——三宅雄二郎、井上哲次郎、桑木厳翼、出隆ほか——

佐藤厚

#### 1. 問題の所在

哲学堂祭とは、井上円了（以下、円了と略称）の遺言に基づき、毎年 11 月上旬に行われている東洋大学の年中行事である。これは円了が亡くなった 1919 年に始まり 2018 年で 100 年目を迎えた伝統行事である。

現行の内容は①墓前祭、②哲学祭、③記念講演の三部からなる。①墓前祭は円了の法要である。哲学堂の向いにある蓮華寺（日蓮宗）にある円了の墓前で、住職による読経、焼香、廻向に次いで東洋大学学長による「南無絶対無限尊」三唱が行われる。この「南無絶対無限尊」とは、円了が作った哲学堂の本尊への呼びかけの言葉である。続いて哲学堂に場所を移して②哲学祭が行われる。これは円了が古今東西の哲学者から選定した四聖、すなわち釈迦、孔子、ソクラテス、カントの 4 人の聖人について、毎年一人ずつ祭る祭典である。儀式が行われる四聖堂の天井には、東西南北それぞれに四人の哲学者の文字が書いてあり、参列者も年に応じて四聖堂前での位置を変える。式次第は、最初に東洋大学理事長の挨拶があり、続いて円了の著作の一節を朗読する「学祖遺文朗読」が円了の子孫により行われる。そして東洋大学学長による「南無絶対無限尊」三唱が行われる。その後、③記念講演が行われる。これはその年の聖人についての講演で、基本的には当該分野が専門の東洋大学の教員が担当する。釈迦、

孔子であれば、東洋思想文化学科の仏教学、中国哲学の教員、ソクラテス、カントであれば、哲学科の教員が行うという形である。円了の遺言にはこの祭りは何人にも公開するようにとしてあるが、参列者は東洋大学関係者を中心に約 20-30 名である。

この哲学堂祭は円了の遺言に基づいて現在まで続いてきた行事であるから、東洋大学のアイデンティティそのものといっても過言ではないほどの重要な行事である。さらに東西の哲学者を記念するお祭で 100 年も続いているものは世界唯一といってもよいのではなかろうか。そこで行われる四聖人に関する記念講演は、東洋大学の「知」の伝統を象徴する行事であると同時に、近代日本の「知」の伝統を象徴するものといってもよいと思う。副題に掲げた三宅雄二郎、井上哲次郎、桑木厳翼、出隆らはみな近代日本を代表する知性である。

筆者が哲学堂祭に関心を持ったのは 100 年間の記念講演がどのような人物によってなされたかを知りたいと思ったからである。しかし実際に調べてみると、意外にも哲学堂祭の歴史あるいは記念講演での講演者のリストなどが整理されていないことがわかった。そこで『東洋大学百年史』をはじめ、『東洋哲学』、『東洋大学新聞』、『東洋大学報』という資料をもとに調べ始めたが、意外にも哲学堂祭の詳しい記載がない年が多いことがわかった<sup>1</sup>。そこで東洋大学の職員の方の協力を仰ぎ、記念講演の講演者を復元する作業を開始した。その結果、100 年すべてについてはわからなかったが、判明した分だけでも報告することにした。

## 2. 100 年間の哲学堂祭と記念講演の講演者

### 2. 1. 名称の問題 — 哲学祭、哲学堂例祭、哲学堂祭

まず祭の名称の問題から整理する。現在、大学ではこの祭典を「哲学堂祭」と呼んでいる。しかし、この名称が登場するのは、現在確認できる限り 1970 年代後半からであり、それまでは「哲学堂例祭」と呼んでいた。

この祭典の名称の変遷は次のように整理できる。まず哲学者の祭典を始めた円了は、その祭のことを「哲学祭」と呼び、遺言では「四聖の祭典」と呼んだ。円了没後 2 年目の 1920 年から、現在と同じように、①円了の法要と②哲学者の祭の二つの儀式が行われるようになったが、1943 年までは、前者を「井上円了博士〇回忌法要」と呼び、後者を「四聖祭」、「哲学祭」、あるいは四聖の名称を付けた形（釈迦の年で

あれば釈聖祭)で呼んでいた。そして、両者を合わせた祭典全体を「哲学堂例祭」と呼んでいた。整理すると次のようになる。

哲学堂例祭 = 円了の法要 + 四聖祭、哲学祭、○聖祭

戦後もこの「哲学堂例祭」という名称が用いられる。そうした中、1977年の『校友会報』に祭典全体を指す名称として「哲学祭（哲学堂祭）」という見出しが出る。四聖の祭りだけであるはずの「哲学祭」が祭典全体の名称となり、その別名のような形でカッコ書きで「哲学堂祭」が用いられているのである。これが筆者が確認した限りでの「哲学堂祭」という名称の初出である<sup>2</sup>。そして翌年1978年の『校友会報』では「哲学堂祭」の名称だけを使うようになる。しかし、さらにその翌年の1979年になると、見出しは「哲学堂祭」だが、記事には「哲学堂例祭は」とあり、哲学堂祭と哲学堂例祭とが混在している。同様の混乱は大学発行の機関紙『東洋大学報』にも見られる。1980年の記事を見ると「昭和55年度哲学堂例祭」という記事がある一方、「哲学堂祭記念講演」とあるように、ここでも「哲学堂例祭」と「哲学堂祭」が混在している。おそらく、1970年代後半から1980年代初めにかけて、東洋大学内部で用語の混乱が起こっていたと考えられる。その後、少なくとも1986年以後は祭典全体を指す名称として「哲学堂祭」だけを用いるようになり、それが現在につながっている。本論文では現在の呼び方に倣い、行事全体をさす用語として「哲学堂祭」を用いる。

## 2. 2. 哲学堂祭前史

1892年(明治25)に行われた哲学祭の記事を収録した『哲学祭記』<sup>3</sup>には、哲学祭すなわち四聖の祭典は円了が、東京大学文学部哲学科卒業直前<sup>4</sup>の1885年(明治18)10月27日に最初に行ったことが記される。なぜ10月27日であるかという点、釈尊、孔子、ソクラテス、カントの4人の寿命を足して300とし、それを1月1日から数えて300日目になるからである。円了が行った哲学祭がどこまで恒例化していたかはわからない<sup>5</sup>。1892年(明治25)の哲学祭では、10月27日の夜に哲学館一同が集まり、四聖の肖像画を掲げ、『大学』、『中庸』、『論語』、『易経』、『法華経』、浄土三部経、『瑣氏(ソクラテス)伝記』、『純粹道理批判』を供えて四聖を讃える祭文を読んだことが記されている<sup>6</sup>。

その後、円了は遺言<sup>7</sup>の中で、自分自身の法要と四聖の祭典を年中行事にすることを定めた。遺言は12項からなるが、以下の第8項から第10項が関連する。

第8項 法会ハ毎年一回、之ヲ営ミ、其日ハ祥月ニ依ラズ11月上旬ノ日曜ヲ用フベシ。其式場ハ和田山哲学堂ト規定シ置クベシ。其法会ニハ何人モ参会スル様ニ公開スベシ。東洋大学ニ関係アル僧侶ナラバ、宗派ノ何タルヲ問ハズ、式ヲ開ク時ニ一回読経スルコトヲ依頼スベシ。之ニ続キテ拙著ノ一章ヲ朗読スルノ慣例ヲ作ルベシ。当日ノ来会者ヘハ甘酒、若クハ紅茶カ珈琲ヲ差シ出スベシ。

第9項 此毎年ノ法会ノ日ニハ四聖ノ祭典ヲモ挙行スベシ。法会ヲ午前トスレバ祭典ヲ午後トスベシ、或ハ二者共ニ午後ニ行フ場合ニハ、法会ハ宇宙館ニ於テシ、祭典ハ四聖堂ニ於テスベシ。

第10項 四聖ノ祭典ハ、毎年順次ニ行ヒ、例ヘバ今年釈聖ヲ祭ルトスレバ来年ハ孔聖ヲ祭り、其翌年ニハ瑣聖、其次ハ韓聖ヲ祭ルベシ。而シテ祭典ノ儀式世話ハ東洋大学ヘ委托スベシ。

第8項では日程、場所、公開、読経、自分の著作の一部を朗読すること、来会者への接遇が記されている。第9項では四聖の祭典、すなわち哲学祭も同時に行うことが記される。第10項では四聖を祭る順番と儀式は東洋大学が世話すべきことが記される。毎年11月上旬の日曜日に、哲学堂において行うこと。このように遺言に記すほどであるから、円了にとって自身の法要と並び哲学祭は重いものであったことがわかる。

## 2. 3. 100年間の哲学堂祭

続いて、円了の遺言に基づいて行われてきた哲学堂祭100年の歴史を概観する。ここでは戦前についてやや詳しく紹介することにした。また哲学堂祭を数える時は、「〇回目」ではなく「〇年目」という。それは不明な年があるから単純に通算することはできないからである。

まず1年目(1919年)である<sup>8</sup>。これは11月23日の日曜日に行われた。この時は記念式典と講演会だけであり、同年6月に逝去した円了の法要は行われていない。午前9時から宇宙館の皇国殿で記念式が行われた。まず東洋大学学長の境野黄洋が教

育勅語を奉読し、円了の息子の井上玄一が挨拶している。同 9 時 30 分から釈迦祭が行われ、記念講演として境野黄洋と東洋大学教授の渡辺海旭が講演を行ない、午後 1 時に散開した。

2 年目 (1920 年) は孔子祭の年である<sup>9</sup>。1 周忌法要と孔子祭の 2 部からなる。1 周忌法要は午前 10 時から行われた。1 読経 (寺田慧眼)、2 祭文 (内田周平)、3 遺文朗読 (井上玄一)、4 南無絶対無限尊三唱 (境野黄洋)、5 墓前祭、読経 (金日聰) からなる。続く孔子祭は午後 1 時から四聖堂で行われた。次第は、1 挨拶 (境野黄洋)、2 祭文朗読 (土屋弘)、3 記念講演 (井上哲次郎、岡田良平)、4 挨拶 (井上玄一) である。

3 年目 (1921 年) はソクラテス祭の年である<sup>10</sup>。3 周忌法要とソクラテス祭の 2 部からなる。法要は午前 10 時半から行われた。次第は 1 読経 (寺田慧眼)、2 遺文朗読 (井上玄一『哲学正気歌』)、3 南無絶対無限尊三唱 (境野黄洋)、4 墓参である。ソクラテス祭は午後 1 時から四聖堂で行われた。次第は、1 挨拶 (境野黄洋)、2 ソクラテスを祭るの辞 (中島徳蔵)、3 祭文 (井上玄一)、4 祝詞 (ギリシア代理公使・コンスタンチニデイ)、5 記念講演 (中島徳蔵、岡田良平、三宅雄二郎) である。この時の三宅雄二郎の講演と、中島徳蔵との掛け合いが読売新聞にも紹介されている。またこの時の中島徳蔵の講演内容が残っている。

4 年目 (1922 年) はカント祭の年である<sup>11</sup>。4 周忌法要とカント祭の 2 部からなる。法要は、1 挨拶 (岡田良平)、2 読経、3 遺文朗読、4 南無絶対無限尊三唱 (前学長、前田慧雲) からなる。カント祭は、午前 10 時半から行われた。次第は、1 一同拝礼、2 祝辞 (ドイツ大使代理ミヘルゼン)、3 記念講演 (得能文「カントの根本悪」、桑木厳翼「カントの天才論」) である。以上、四聖が一回りする 4 年目までは順調に四聖人の順で講演が行われた。

5 年目 (1923 年) は 5 月に起こった境野事件で東洋大学が揺れた年であった。これは職員の解職をめぐる学内騒動により、境野が文部省から学長職を取り消された事件である。さらに同年 9 月の関東大震災により哲学堂も損傷した。哲学堂祭が実施されたかどうかは不明である<sup>12</sup>。6 年目 (1924 年) にもアクシデントが起こった。この時は学長であった中島徳蔵が哲学堂祭開始直後に暴漢に襲われ重傷を負うという事件が発生したため、以後の行事は中止となった。ちなみにこの年の講演は順番からいえば釈迦であるがカントが予定されていた。理由はわからないが、この年がカントの生誕 200 年であったことと関連するかもしれない。

7 年目（1925 年）は釈迦祭の年である<sup>13</sup>。内容は円了先生 7 年忌法会と釈迦祭からなる。法会は午前 10 時より開始し、1 挨拶（中島徳蔵）、2 読経（蓮華寺住職、金子日聡）、3 遺文朗読（中島徳蔵）、4 南無絶対無限尊三唱（中島徳蔵）である。続いて釈迦祭は、挨拶（中島徳蔵）、一同拝礼の後、宇宙館で釈迦に関する講演が行われた。講演者は、ブルーノ・ペツォルド（第一高等学校教員）と渡辺海旭である。この時はドイツ大使のゾルフも聴講に訪れている。

8 年目（1926 年）は孔子祭である<sup>14</sup>。内容は円了先生 8 年忌法会と孔子祭からなる。法会は、読経（金子日聡）、遺文朗読（中島徳蔵）、4 南無絶対無限尊三唱（中島徳蔵）の順で行われた。孔子祭は、一同礼拝に続き孔子に関する講演会（市村瓊次郎）が行われた。

9 年目（1927 年）はソクラテス祭である<sup>15</sup>。円了先生 9 年忌法会とソクラテス祭からなる。法会は 1 挨拶（中島徳蔵）、2 読経（金子日聡）、3 遺文朗読（中島徳蔵）、南無絶対無限尊三唱（中島徳蔵）からなる。ソクラテス祭は、1 一同拝礼の後に、井上哲次郎と三枝博音が記念講演を行った。

10 年目（1928 年）は釈迦祭である<sup>16</sup>。円了先生 10 年忌法会と釈迦に関する講演が行われた。法要は、1 挨拶（中島徳蔵）、2 読経（金子日聡）、3 遺文朗読（中島徳蔵）、4 南無絶対無限尊三唱（中島徳蔵）である。四聖祭は、1 一同拝礼（四聖堂）、2 釈迦に関する講演として渡辺海旭「小乗と大乘に就いて」、長井真琴「仏教の二大方面」である。この年は順番から言えばカントであるが釈迦になっている。これは 6 年目にイレギュラーでカントが予定されていたから、その分を飛ばしたからと考えられる。11 年目（1929 年）は不明である。

12 年目（1930 年）はソクラテス祭の年であるが、記念講演は中止された<sup>17</sup>。中島徳蔵は傍聴者の少なさを嘆いている。さらに和田山（哲学堂）で講演を行うのは便利でないので今年から東洋大学で行うようにしたというが、予定されていた出隆の講演は中止になっている。13 年目（1931 年）はカント祭の年である<sup>18</sup>。法会は哲学堂で行い、記念講演は大学の講堂で行われた。14 年目（1932 年）は釈迦祭の年である<sup>19</sup>。法会と記念講演が行われた。記念講演は当時東洋大学の学長であった高楠順次郎が釈迦について行い、柴田甚五郎と中島徳蔵が円了にちなんだ講演を行った。15 年目（1933 年）は孔子祭の年である<sup>20</sup>。記念講演は三宅雄二郎が行った。

16 年目から 21 年目までは不明である。22 年目（1940 年）は釈迦祭の年である<sup>21</sup>。この年は聖徳太子像の序幕式が行われた。講演は井上哲次郎が行った。25 年目（1943

年)はカント祭の年である。この年の記念講演の人物などはわからない。ただ、当時の学長である高島米峰の自伝によれば11月7日に哲学堂祭があったことが記される<sup>22</sup>。高島に関して言えば、哲学堂祭の3日後に刊行された『文学報国』に「カント今在らば」という論説を掲載している<sup>23</sup>。趣旨は、もし現代に『永久平和論』を書いたカントがいたならば、侵略する米英に対して自衛を行う「大東亜共同宣言」に賛成していたであろうということである。ここで高島がカントに触れたのは、ひょっとして哲学堂祭のカント祭が影響したのかもしれない。

27年目(1945年)11月、日本の敗戦から3か月後であるが哲学堂祭が行われた<sup>24</sup>。記念講演は出隆が「幽霊退治とソクラテス」という題目で行った。以後、32年目(1950年)を除いて、28年目(1946年)から34年目(1952年)が不明である。36年目(1954年)の記事には1祭典(宇宙館)、2学祖と哲学堂についての話:井上玄一(四聖堂)、3学祖の少年時代:西義雄(宇宙館)、4カントについての講演:齋藤教授(宇宙館)という簡単な流れが伝わる<sup>25</sup>。以後、数年おきに断片的な記録が残っている。

まとまった記録が出てくるのは56年目(1974年)からである。56年目(1974年)は法要と哲学祭からなっている。法要は宇宙館で行われ、哲学祭は、カント讃仰(四聖堂)、遺文朗読:井上民雄、南無絶対無限尊三唱(千葉常務理事)、記念講演(大村晴雄「カントについて」)の順番である<sup>26</sup>。ここで四聖祭が哲学祭と呼ばれていることが注目される。57年目(1975年)から哲学堂の管理が東京都から中野区になる。

59年目(1977年)から新しい動きになる。それは儀礼の構成が墓前祭と哲学祭の二部構成になることである<sup>27</sup>。すなわち墓前祭、哲学祭そして記念講演(泉治典「ソクラテスについて」)が行われた。これ以後、現在まで哲学堂祭は、墓前祭と哲学祭の組み合わせで行われている。69年目(1987年)は東洋大学の創立百周年記念で、通常の哲学堂での記念講演は行われず、中野サンプラザで東洋大学教授の金岡秀友と作家の三浦朱門の講演が行われた。その後、99年目(2017年)まで継続し、100年目である2018年は講演会場である宇宙館が工事のために使用できず、講演は中止となった。

## 2. 4. 儀式の構成の変化

以上、100年間の哲学堂祭の流れを見てきた。哲学堂祭は円了の遺言に基づくものであるが、この100年間で式次第は大きく変化してきている。ここでは3回分の式次

第をとりあげ検討する。＜表 1＞は、左から円了の遺言、(1) 2 年目 (1920 年)、(2) 56 年目 (1974 年)、(3) 60 年目 (1978 年) の次第の比較である。

＜表 1＞哲学堂祭 式次第の変遷

円了の遺言	(1) 2 年目 (1920 年)	(2) 56 年目 (1974 年)	(3) 60 年目 (1978 年)
日曜	日曜	土曜	土曜
		(墓前祭)	①墓前祭 (蓮華寺)
①法要 (宇宙館) ・ 読経 ・ 遺文朗読	①法要 (宇宙館) ・ 読経 ・ 祭文 ・ 遺文朗読 ・ 南無絶対無限尊三唱 ・ 墓前祭	①法要 (宇宙館) ・ 挨拶 ・ 読経	
②四聖祭 (四聖堂)	②四聖祭 (四聖堂) ・ 挨拶 ・ 祭文朗読  ③記念講演 (宇宙館) ・ 挨拶	②四聖祭 (四聖堂) ・ 讃仰 ・ 遺文朗読 ・ 南無絶対無限尊三唱  ③記念講演 (宇宙館)	②哲学祭 (四聖堂) ・ 挨拶 ・ 遺文朗読 ・ 南無絶対無限尊三唱  ③記念講演 (宇宙館)

まず (1) 2 年目 (1920 年) を見る<sup>28</sup>。曜日は日曜日であり、遺言と同じである。内容は①法要と②四聖祭とに分かれる。①法要は、読経、祭文、遺文朗読、南無絶対無限尊三唱、墓前祭からなる。遺言と比較すると、読経、遺文朗読が共通している。南無絶対無限尊三唱をここに入れるのは遺言にはないので、円了の弟子たちが考えたものであろう。また哲学堂での法要が終わってから蓮華寺での墓前祭が行われていた。続いて②四聖祭は、挨拶、祭文朗読、記念講演、挨拶からなる。この中、祭文朗読はその年の礼拝対象の聖人をたたえる言葉であろう。ちなみに遺言では四聖祭



の儀式とその順序については記されていないので、弟子たちが考えたものであろう。以上、2年目の式次第は遺言を基礎として、それに南無絶対無限尊三唱や記念講演などが加えられたものであることがわかった。

続いて(2)56年目(1974年)である<sup>29</sup>。前と54年もの間隔があるが、それはこの年までまとまった式次第がわかる資料がないからである。これを以前と比較すると次のことが分かる。第一に、開催曜日が土曜日になっている。現在残っている記録で土曜日に開催されたのは51年目(1969年)である。以後、現在に至るまで土曜日開催となっている。第二に法要に入る前に墓前祭が行われている。これ以前の資料としては53年目(1971年)に1墓前法要(蓮華寺)、2法要(宇宙館)、3四聖祭(四聖堂)、4記念講演という次第が見える<sup>30</sup>。第三に法要の次第である。2年目の1挨拶、2読経、3遺文朗読、4南無絶対無限尊三唱の中、56年目では、3遺文朗読、4南無絶対無限尊三唱が四聖祭に組み入れられた。すなわち2年目では円了個人の行事＝法要と、四聖人に関する行事＝四聖祭が区別され、「遺文朗読」はもちろん円了のことだから法要の中で行われていたが、56年目では四聖祭の一部になったのである。その理由はわからない。56年目の1讃仰とは、その年の四聖をたたえる言葉であると思われるので、2年目の祭文と同じ性格のものと考えられる。

続いて(3)60年目(1978年)を検討する。これが現在まで続いている形式である。第一に、曜日は56年目と同じ土曜日である。第二に、式が①墓前祭と②哲学祭(四聖祭)の二部から構成され、56年目まであった哲学堂の宇宙館での円了の法要がなくなっている。これは同じ法要であるから墓前祭に統合したのであろうか。第三に哲学祭(四聖祭)の内容についてである。56年目との違いは、讃仰という行事がなくなったことである。これは四聖祭の根本にかかわる大きな変化である。なぜなら讃仰すなわちその年の聖人をたたえる行事がなくなったことになり、そこで行われている儀式が誰のためのものかがわからなくなってしまったからである。つまりそこで行われる理事長挨拶、遺文朗読、南無絶対無限尊三唱はどれも直接その年の四聖には関連しない。換言すれば、聖人の祭祀が行われない四聖祭になっているのである。そして四聖祭が終わった記念講演において初めてその年の聖人のことが詳しく言及されることになっている。これは大きな変化と言わざるを得ない。

## 2. 5. 講演者

続いて現在判明した限りでの 100 年間の記念講演での講演者リストをまとめると  
 <表 2>のようになる。100 年間のうち、哲学堂祭についての記録が分かったのは 82  
 年分。そのうち、5 年は記念講演が中止となったため、講演が行われたのは 77 年分  
 となる。哲学堂祭についての記録が分からなかった 18 年分は講演が行われたかどう  
 かも含め不明である。

<表 2> 記念講演での講演者リスト

略号：釈=釈迦、孔=孔子、ソ=ソクラテス、カ=カント ●=中止

	西	和	祭	講演者			昭	略	
					18	1936	昭 11	釈	不明
1	1919	大 8	釈	境野黄洋、渡辺海旭	19	1937	昭 12	孔	不明
2	1920	大 9	孔	井上哲次郎、 岡田良平	20	1938	昭 13	ソ	不明
3	1921	大 10	ソ	中島徳蔵、岡田良平、 三宅雄二郎	21	1939	昭 14	カ	不明
4	1922	大 11	カ	得能文、桑木厳翼	22	1940	昭 15	釈	井上哲次郎
5	1923	大 12	×	●実施せず	23	1941	昭 16	孔	●孔子祭中止
6	1924	大 13	カ	●中島徳蔵襲撃事件	24	1942	昭 17	ソ	不明
7	1925	大 14	釈	ベツオールド、 渡辺海旭	25	1943	昭 18	カ	不明
8	1926	大 15	孔	市村瓚次郎	26	1944	昭 19	?	不明
9	1927	昭 2	ソ	井上哲次郎、 三枝博音	27	1945	昭 20	ソ	出隆
10	1928	昭 3	釈	渡辺海旭	28	1946	昭 21	カ	不明
11	1929	昭 4	孔	不明	29	1947	昭 22	釈	不明
12	1930	昭 5	ソ	●出隆講演中止	30	1948	昭 23	孔	不明
13	1931	昭 6	カ	大島正徳	31	1949	昭 24	ソ	不明
14	1932	昭 7	釈	高楠順次郎、柴田甚五 郎、中島徳蔵	32	1950	昭 25	カ	鬼頭英一
15	1933	昭 8	孔	三宅雄二郎	33	1951	昭 26	釈	不明
16	1934	昭 9	ソ	不明	34	1952	昭 27	孔	不明
17	1935	昭 10	カ	不明	35	1953	昭 28	ソ	不明
					36	1954	昭 29	カ	齋藤繁雄
					37	1955	昭 30	釈	西義雄
					38	1956	昭 31	孔	野村岳陽
					39	1957	昭 32	ソ	久保勉
					40	1958	昭 33	カ	園田義道

41	1959	昭 34	釈	不明
42	1960	昭 35	孔	杖下隆之
43	1961	昭 36	ソ	馬場文翁
44	1962	昭 37	力	飯島宗享
45	1963	昭 38	釈	玉城康四郎
46	1964	昭 39	孔	杖下隆之
47	1965	昭 40	ソ	園田義道
48	1966	昭 41	力	中島盛夫
49	1967	昭 42	釈	西義雄
50	1968	昭 43	孔	山田勝美
51	1969	昭 44	ソ	榊田啓三郎
52	1970	昭 45	力	西義雄、齋藤繁雄
53	1971	昭 46	釈	西義雄
54	1972	昭 47	孔	境武男
55	1973	昭 48	ソ	飯島宗享
56	1974	昭 49	力	大村晴雄
57	1975	昭 50	釈	大鹿実秋
58	1976	昭 51	孔	金岡照光
59	1977	昭 52	ソ	泉治典
60	1978	昭 53	力	齋藤繁雄
61	1979	昭 54	釈	菅沼晃
62	1980	昭 55	孔	新田幸治
63	1981	昭 56	ソ	泉治典
64	1982	昭 57	力	高峰一愚
65	1983	昭 58	釈	大鹿実秋
66	1984	昭 59	孔	穴沢辰雄
67	1985	昭 60	ソ	泉治典
68	1986	昭 61	力	末木剛博
69	1987	昭 62	釈	※創立 100 周年記念 講演会 金岡秀友、三浦朱門
70	1988	昭 63	孔	中下正治

71	1989	平元	ソ	田島孝
72	1990	平 2	力	針生清人
73	1991	平 3	釈	菅沼晃
74	1992	平 4	孔	阿部正次郎
75	1993	平 5	ソ	針生清人
76	1994	平 6	力	量義治
77	1995	平 7	釈	森章司
78	1996	平 8	孔	新田幸治
79	1997	平 9	ソ	針生清人
80	1998	平 10	力	針生清人
81	1999	平 11	釈	川崎信定
82	2000	平 12	孔	新田幸治
83	2001	平 13	ソ	末次弘
84	2002	平 14	力	長島隆
85	2003	平 15	釈	森章司
86	2004	平 16	孔	山田利明
87	2005	平 17	ソ	相楽勉
88	2006	平 18	力	中里巧
89	2007	平 19	釈	渡辺章悟
90	2008	平 20	孔	小路口聡
91	2009	平 21	ソ	田島孝
92	2010	平 22	力	長島隆
93	2011	平 23	釈	岩井昌悟
94	2012	平 24	孔	吉田公平
95	2013	平 25	ソ	柴田隆行
96	2014	平 26	力	ライナ・シュルツア
97	2015	平 27	釈	伊吹敦
98	2016	平 28	孔	山田利明
99	2017	平 29	ソ	辻内宣博
100	2018	平 30	×	●宇宙館工事のため 中止

続いてどのような人物が講演を行ったかを整理したものを示す。まず大きく戦前（＜表3＞）と戦後（＜表4＞）とに分け、釈迦、孔子、ソクラテス、カントの順で示す。講演者は、氏名、講演した年、専門を記した。専門は、講演者の著作などから著者が判断したものであり厳密なものではないことをお断りしておく。また氏名の横に丸カッコの数字があるのは複数回講演した回数である。

＜表3＞戦前：1919年から1944年までの講演者

氏名	年	専攻
＊釈迦（6名）		
1 境野黄洋	1919	仏教史学
2 渡部海旭③	1919, 192,1928	仏教学
3 ブルーノ・ベツオールド	1925	仏教学
4 長井真琴	1928	パーリ仏教
5 高楠順次郎	1932	インド、パーリ仏教
6 井上哲次郎	1940	哲学
＊孔子（4名）		
1 井上哲次郎	1920	哲学
2 岡田良平	1920	官僚
3 市村瓊次郎	1926	東洋史学 中国古典
4 三宅雄二郎	1933	哲学
＊ソクラテス（5名）		
1 中島徳蔵	1921	倫理学
2 岡田良平	1921	官僚
3 三宅雄二郎	1921	哲学
4 三枝博音	1927	ヘーゲルなど
5 井上哲次郎	1927	哲学
＊カント（3名）		
1 得能文	1922	近世哲学
2 桑木厳翼	1922	カント
3 大島正徳	1931	ヒューム ロック
＊その他（井上円了、2名）		
1 柴田甚五郎	1932	中国哲学
2 中島徳蔵	1932	倫理学

＜表4＞戦後：1945年から2018年までの講演者

氏名	年	専攻
＊釈迦（9名）		
1 西義雄③	1955, 1967, 1971	インド仏教
2 玉城康四郎	1963	インド仏教、 中国仏教
3 大鹿実秋 ②	1975,	インド、チベット仏教
	1983	
4 菅沼晃 ②	1979, 1991	インド仏教
5 森章司②	1995, 2003	インド仏教
6 川崎信定	1999	インド仏教、 チベット仏教
7 渡辺章悟	2007	インド仏教

8 岩井昌悟	2011	インド仏教
9 伊吹敦	2015	中国仏教
<b>*孔子 (12 名)</b>		
1 野村岳陽	1956	中国哲学
2 杖下隆之②	1960, 1964	中国哲学
3 山田勝美	1968	中国哲学
4 境武男	1972	中国文学
5 金岡照光	1976	中国文学
6 新田幸治③	1980, 1996, 2000	中国史
7 穴沢辰雄	1984	中国哲学
8 中下正治	1988	近代中国史、 中国哲学
9 阿部正次郎	1992	中国文学
10 山田利明②	2004, 2016	中国宗教、道教
11 小路口聡	2008	中国哲学
12 吉田公平	2012	中国哲学
<b>*ソクラテス (14 名)</b>		
1 出隆	1945	ギリシア哲学
2 鬼頭英一	1953	ハイデガー、 実存主義
3 久保勉	1957	プラトン
4 馬場文翁	1961	倫理学
5 園田義道	1965	ライプニッツ、 ホワイトヘッド
6 榊田啓三郎	1969	キルケゴール
7 飯島宗享	1973	キルケゴール、 シェーラー
8 泉治典 ③	1977 1981, 1985	キリスト教、 キルケゴール

9 田島孝 ②	1989, 2009	プラトン
10 針生 清人 ②	1993, 1997	哲学一般、 井上円了
11 末次弘	2001	サルトル、 メルロポンティ
12 相楽勉	2005	ハイデガー、 近代日本思想
13 柴田隆行	2013	ヘーゲル
14 辻内宣博	2017	中世哲学
<b>*カント (12 名)</b>		
1 齋藤繁雄 ③	1954, 1970, 1978	ヒューム、 ホワイトヘッド
2 園田義道	1958	ライプニッツ、 ホワイトヘッド
3 飯島宗享	1962	キルケゴール、 シェーラー
4 中島盛夫	1966	メルロポンティ、 ドゥルーズ
5 大村晴雄	1974	カント、ヘーゲル
6 高峰一愚	1982	カント
7 末木剛博	1986	西田幾多郎 分析哲学 比較思想
8 針生清人 ②	1990, 1998	哲学一般、井上円了
9 量義治	1994	カント、宗教哲学、 キリスト教
10 長島隆 ②	2002, 2010	シェリング、 ドイツ観念論
11 中里巧	2006	キルケゴール、 北欧思想
12 ライナ・シ ュルツァ	2014	井上円了、 近代日本思想

*その他 (2名)		
1 金岡秀友	1987	インド仏教 *100周年記念講演

2 三浦朱門	1987	作家 *100周年記念講演
--------	------	------------------

戦前戦後を通算すると講演者の合計は69名である。この中、最多講演者は4回の針生清人である。3回は井上哲次郎、渡辺海旭、西義雄、新田幸治、泉治典、齋藤繁雄の6名である。外国人は7年目(1925年)のブルーノ・ペツォールド(Bruno Petzold)、96年目(2014年)のライナ・シュルツァ(Rainer Schulzer)の2名であり、両者ともドイツ人である。また講演の際の原文が残っている人が3名、要旨が残っている人が7名いる。

### 3. まとめ

以上、井上円了の遺言に基づき、1919年から100年以上続いている東洋大学伝統の年中行事である哲学堂祭について、その歴史と講演者について調査した結果を報告した。すべての年が明らかになったわけではないが、哲学堂祭の大きな流れ、次第の変化、そして講演者の多くが明らかになった。冒頭で述べたように、哲学堂祭は世界唯一の古今東西の哲学者を祀る行事であり、中で行われてきた記念講演は、近代日本の知を代表する行事である。今後も不明の部分の調査を続け、調査の完璧を期したい。また、残っている講演記録や、講演者のデータを集成した資料集を作りたいと考えている。

### 参考文献

#### <単行本>

東洋大学創立100年史編纂委員会『東洋大学百年史 通史編』東洋大学、1988年。  
三浦節夫『井上円了—日本近代の先駆者の生涯と思想』教育評論社、2014年。

#### <新聞、雑誌>

『東洋大学新聞』  
『東洋哲学』

『観想』

『東洋大学学報』

『東洋大学校友会報』

## 注

\* 本論文を作成するにあたり、研究推進課の飯村桂子様、およびエクステンション課の皆様からご教示をいただきました。お礼申し上げます。

<sup>1</sup> 『東洋大学百年史』には「哲学堂祭は財団法人哲学堂と東洋大学との協力のもとで、哲学堂の精神を普及することを目的としたものと考えられるが、財団法人哲学堂側と東洋大学との間で、何かと齟齬をきたしていたらしいことが指摘されている。また参会者が決まった一部の者だけで、単なる年中行事の一つになって、全学的な関心となっていないことが、「学祖の精神の高揚」期に一部で問題とされていた（愛沢恒雄「学祖の精神を高揚せよ」『東洋大学新聞』第118号、昭和9年12月14日）」とある。『東洋大学百年史通史編Ⅰ』、東洋大学、1993年、p.717。

<sup>2</sup> これに関連して『東洋大学百年史』には、東洋大学新聞をもとに、1926年には四聖祭が「哲学堂（例）祭」と呼ばれていたこと、1927年以後は祭典全体を哲学堂祭（例祭）と呼んでいたとある。すると「哲学堂祭」という用例は戦前からあったことになるが、これはもとになった資料を確認する必要がある。同上、p.714。

<sup>3</sup> 『哲学祭記』、哲学館、明治27年。国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧（2019年12月24日）。

<sup>4</sup> 卒業式は10月31日である。

<sup>5</sup> 『天則』第4編第5号、1891年11月、第4編第7号、1892年1月、第6編第6号、1893年12月、に哲学祭に関する記事がある。

<sup>6</sup> 『哲学祭記』、前掲書、pp.5-7。

<sup>7</sup> 井上円了「遺言状」『百年史 資料編Ⅰ・上』、東洋大学、1988年、pp.69-72。

<sup>8</sup> 『東洋哲学』第26編第12号、1919年12月。

<sup>9</sup> 『東洋哲学』第27編第12号、1920年12月。

<sup>10</sup> 『東洋哲学』第28編第12号、1921年12月。

<sup>11</sup> 『東洋哲学』第29編第12号、1922年12月、pp.47-48。

<sup>12</sup> この年の学内紛擾によって校友会が学長派（境野側）と反学長派（反境野側）に二分

した。機関誌『東洋哲学』は紛擾後、学長派の雑誌として機能した。『東洋哲学』第31編第1号「和田山の名月」には「何故にか、本年は例年の四聖祭も行はれない。学校側から殆ど参拝者の無かつたのは心もとなく感じた」(p.14)とある。そうするとこの年は哲学堂祭は行われなかったと考えられるが、『東洋大学百年史 通史編 I』は、2年後の大正15年に「第七回」の哲学堂例祭が行われていたことを挙げ、「この回数が事実とすれば、中断することなく例年通り哲学堂において、忌法要ならびに四聖祭がおこなわれていたことになる。前記の校友会本部による記事が事実とすれば、東洋大学は日をかえておこなったことになろう」(p.714)と推測している。

13 『読売新聞』、1925年10月26日付。

14 『東洋大学百年史 通史編 I』、東洋大学、1993年、p.716。

15 『現代仏教』第44号、1927年12月、p.87。

16 『観想』、1928年11月号、pp.188-189。

17 中島徳蔵先生学徳顕正会編『中島徳蔵先生』、中島徳蔵先生学徳顕正会、1962年、p.399。

18 『東洋大学百年史 通史編 I』、前掲書、p.716。

19 同書、p.716。

20 同書、p.716。

21 秋田雨雀『秋田雨雀日記』第3巻、未来社、1965年、p.248。

22 高島米峰『高嶋米峰自叙伝』、学風書院、1950年、p.121。

23 『文学報国』、1943年11月10日。

24 出隆『愚を知る』、小山書店、1947年。

25 『東洋大学新聞』、1954年11月25日付。

26 『東洋大学報』第9号、1974年11月。

27 『校友会報』第106号、1977年12月。

28 『東洋哲学』第27編第12号、1920年12月。

29 『東洋大学報』第35号、1974年11月。

30 『東洋大学報』第22号、1971年11月。

(佐藤厚：井上円了研究センター客員研究員)